
3月12日(1)

(森安章人、SOS! 500人を救え! 3・11 石巻市立病院の5日間、三一書房、2013、p.67)

2014年9月26日、災害医学抄読会 <http://plaza.umin.ac.jp/~GHDNet/circle/>

【3月12日】

大震災翌日の午前5時30分、依然として町一体は水没した状態になっていた。周囲には家の形をかるうじて残すものが数件あるだけで、まるで荒野のような光景だった。日和山の麓に押し上げられた瓦礫は一晩中燃え続け、人の気配も、動物などの姿も全くなかった。

屋上から周囲を見渡すと、病院の1階には車がめり込み、十数台の車が山積みとなっていた。土台だけとなった家の跡地や道には、いたるところに流木やパルプを含んだヘドロ、流された瓦礫などが散乱しており、焦げる煙の臭いと生臭いヘドロの臭いがした。旧北上川沿いにあった職員駐車場やその隣の神社は大きく川にめぐり取られていた。病院北側の道は水没し、地盤沈下を思わせた。しかし、さらに日和山側は逆に道が盛り上がりアスファルトの山となっており、地盤が動いた形跡が見て取れた。

午前6時になると病院の全員が医局に集合し、定刻通りミーティングが始まった。直前に市役所から連絡があり、茨城からのヘリで手術患者を搬送する目処が立ったことで、少しは安堵の空気が流れていた。ミーティングの最後に、院長の口から津波の襲来時に病院内にいた人間のうち、施設担当のT、Oの二人の安否が不明と発表されると、職員たちの顔が一斉に曇った。

内科の患者の様子を見に行くと、呼吸音に変化はなかったが全身状態が悪化していた。痰の量がかなり多かったが、強力な吸引器もなく、大きな注射器による吸引なども試みたが上手くいかなかった。昨日手術を受けた外科の患者はストレッチャーに移され、顔色も良く、ヘリで移送する準備もすっかり終わっていた。しかし、待てど暮らせどヘリは姿を現さず、本部は再び暗い雰囲気にも包まれた。

午前7時になると、いつものように朝の回診を行った。全身状態が著しく回復した患者、小康状態を保っている患者など容体は様々だった。元気な患者はテレビも携帯も使えず手持ち無沙汰で、窓の外を眺めることしかできなかった。医局に戻ると、見通しの立たない苛立ちと絶望感を口にする若い医者もいた。

脱出用の階段を確保するために中央階段で1階に向かうと、踊り場にまで津波が押し寄せたと見えて、ヘドロが10cmほど一面に積もり、瓦礫も混ざって行く手を阻んでいた。

1階にたどり着くと、一面に20cmほどの水がたまっており、天井板は崩れて骨組みが露出し、カウンターも何もかも瓦礫となって1階の奥のほうへ詰め込まれるように流されていた。さらに驚いたことには、津波の勢いで持ち上げられたのか、診療室の椅子が待合室の天井に突き刺さっていた。

脱出路の確保のため、医師、看護師、事務員、技師など職種を問わず皆が加わって手作業で瓦礫と水を除去し、午前9時過ぎには階段と玄関の間になんとか歩けるスペース出来ていた。

検査部長たちの別の一隊は水洗トイレの水を流すために病院横の川からバケツリレーを行っていた。また、総務課や栄養士などの数名が、1階に備蓄された食料のうち無事使えるものを搬出した。食料は患者優先で配ったが、それでも決して十分な量ではなかった。手分けして行なったこれらの作業も、午前

10時ごろには一通り終了した。

みな手袋をしているものの、ヘドロを触った手を洗いたかったが、水は貴重品と言いついて聞かせて全員が我慢した。当たり前と思っていた手を洗うという行為がどれだけ貴重なことか、改めて知った。

2階に引き上げる前、玄関の左手側の瓦礫カウンターの下のヘドロから作業服を着た男性の腕が突き出していたが、瓦礫のため霊安室には近づけず警察の手を借りなければ身元確認もできないため、遺体を確認するだけに留めた。

医局に戻ると、数人の若い医師たちが何やら言い合っていた。話を聞くと、中国からの留学生の医師が、近くのコンビニでまで食料がないか確認しに行くことを主張していた。しかし、津波警報のため病院内に留まるよう指示されている状況で、病院では幹部に位置する医師が秩序を乱すわけにはいかない。そう説得すると、彼は立ち上がろうとしていた椅子にもう一度腰掛けた。明らかに、職員に焦りの色が濃くなっていた。地震や津波が夢であって欲しかった。考えてみれば窓の外の景色は一変していたが、平穏だった昨日からまだ1日も経っていなかった。

東日本大震災における津波の被害については様々な写真を見たことがありますが、震災翌日の病院内の様子については初めて読みました。津波により孤立した中での病院の方々の対応、特に、普通の病院では当たり前のことが困難になることでどのような支障が出るかということが、今回の文献を読んで特に印象に残りました。

何よりも印象に残ったのは、水が貴重品となることの深刻さです。医療器具が限られた物しか使えない状況、食料や衣料が不足する状況についてはイメージしたことがありましたが、水に関しては盲点でした。日常生活で水を買うことが少ないためか、水は水道からいつでも手に入るものという考えがあったのだと思います。言うまでもなく医療行為において水は不可欠なものであり、手を洗う行為に不自由する状況の深刻さについて考えさせられました。脱出路の確保についても、通常の病院では考えないものであり、災害時の病院で必要な対処として勉強になりました。

最後に、この文章全体を通して筆者の先生が常に全体の状況、自分の立場を考えて行動されていたことに驚きました。万が一自分が被災した場合に、この方のような対応ができるようになればと思います。